井上 道義の 未来だった今より

♬ 根付いた！

先日、金沢市の県立音楽堂交流ホール（多目的ホールでなかなか面白い設計です）であった「なんでもカンタービレ」シリーズのある日、客の一人として座っていた時の出来事です。

このシリーズは楽員がプログラムを企画し、それを舞台に乗せる、その上切符のノルマもない、という他のオーケストラでは有り得ない取り組み。演奏のモチベーションが上がります。ただ、その日は企画したメンバーが休んだとか、中心の奏者の腕がどうも落ちているとか何とはなく、批判的な内向きの気持ちで音を聴いていました。

すると近くにいたマスクの男性が、咳が止められなくなったのでしょう。すっと席を立って後ろの方に行き、他の客の妨げにならない所で「ゴホン、ゴホン」。椅子が床に固定されていないのでそんなことも楽なホールだなと感じていると、今度は突然また近くの女性が靴を脱ぎ出しました。「オイオイ、椅子の上に正座かよ」と白い目の態度？で見ていると女性はその靴を持ってそっと立ち、音も無くトイレに。何とその女性の隣の席には横になり、スヤスヤ寝ている2歳ぐらいの赤ちゃん！　お母さんがいない間もベートーベンの7重奏曲が子守唄。何事もなく、帰ってきたお母さんはまた子どもの頭をそっとひざに乗せたのでした。

見ると周辺には他にも小さな子どもが何人も。0歳児のコンサートを続けているラ・フォル・ジュルネ金沢音楽祭の文字通りの「結果」と思える出来事！　咳おじさんもお母さんたちもスマート、周りの人たちもうまくセンス良くそれを受け入れていた。「根付いたんだ」と感激し、事務局みんなで喜んだ出来事でした。

（オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督）

いしかわスクエア

金沢大学 探訪 15

足湯 被災者の心ほっこり

被災した高齢者の手を優しく包み込み、学生たちが話しかける。すると、被災者のこわばっていた顔はゆるみ始め、心にためこんだ不安を語り始めた。東日本大震災で被害を受けた岩手県陸前高田市の集会場で、金沢大学が実施する足湯ボランティアの光景だ。

「足湯」の活動は2007年、能登半島地震発生後の仮設住宅で始まった。たらいにお湯を張り、学生が被災者の手をマッサージしながら話に耳を傾ける。いまも毎月1回、金沢大学能登見守り・寄り添い隊「灯」の学生ボランティアが輪島市門前町の集会場で続けている。